

牧師室から (2022.9.4)

大分暑さが和らいできた。昼には蝉の声、夜には秋の虫の音が聞こえてくる。教会の入り口に吊り下げたある風鈴もそろそろしまう方が良いかもしれない。この風鈴は、大阪にいた頃子どもたち向けのプログラムの中で作ったものだが、海老名教会でも製作を行ってみた。以前に私が作った時に、短冊に一言書くのだが、何を書いたら良いものかと思い、とりあえず「風はおもいのままに吹く」(ヨハネ3・8)が頭に浮かんだので、これにした。ところが後で分かったのだが、これが結構興味深いのを知った。というのは、この聖句をツヴィングリは霊の自由な活動ととらえた。私も同じ考えであった。それに対して、ルターはその風(霊)の働きには必ず「ざわめき」があり、それは音声による説教であるというのである。日本語の「ざわめき」からは「ざわざわ」という音が聞こえてきそうだが、ドイツ語の「ざわめく」(ザウゼン)もいかにもざわめきを表すような語感である。

風鈴の音は目に見えない風(霊)の存在を表して、私どもの聴覚によりそれを感知することとなる。

このようなことを予め考えて会堂の入り口にこの風鈴を吊り下げたわけではないが、結果的に意味深長なものとなった。この風鈴の短冊を見て、会堂に入った人たちが説教に心を馳せていただけなら思いの外である。とはいうものの、前の教会では、皆で作ったいくつかの風鈴をここと同じ様に礼拝堂の入り口に吊り下げて置いたが、説教の間にチリンチリンとなる音がうるさくて邪魔だということで取り下げるしかなかったことがあった。確かに私も説教をしていて、風鈴の音が聞こえると気にはなっていたので、残念であったが、それはそれでよかったと思っている。

(鈴木淳一牧師)